

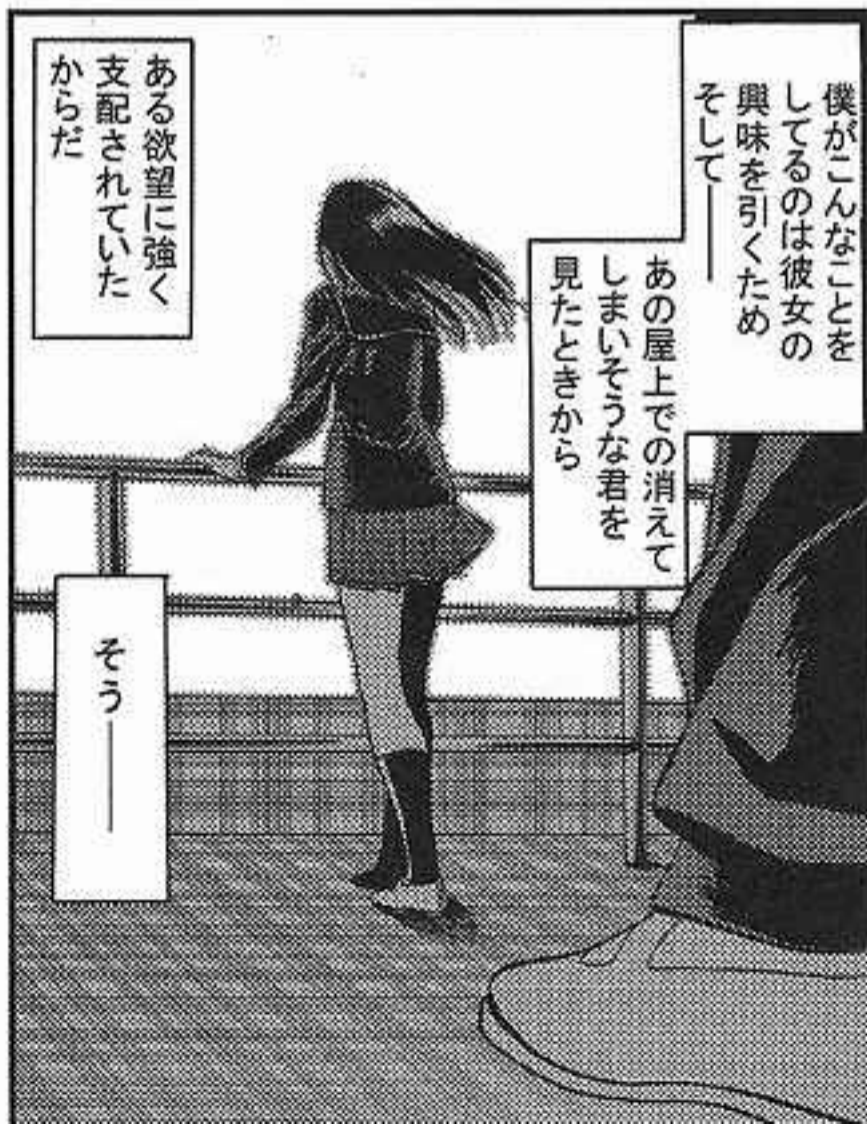
絢
たのしみ
と僕と





なーんて

本当は女の子の力で
殴られたり蹴られたり
したところで大して効かない



僕がこんなことを
してるのは彼女の
興味を引くため
そして

あの屋上での消えて
しまいそうな君を
見たときから

ある欲望に強く
支配されていた
からだ

そう――



このバカッ

おしおきッ

この娘を

壊したい





み、見えちゃ……



なによ

怒ったの？

混乱と怯えと
それを
隠すための嘲笑

こんなことは
想定内のことよ
と言わんばかりの
自信に満ちた態度

実際、頭のいい彼女は
僕を陥れる策を
あらかじめ用意して
あるのだろう

だから
僕は――

飽きたんだよね

えっ……

多分、僕がキレたり
暴力を振るえば
たちまちそれにハマる

今までこういうのも
面白いかなと思って
付き合ってきたけど

なんか最近では
ノれないっていうか

マンネリ
なんだよね

つまんなく
なってきたから
僕もうやめるよ

じゃあ



なっ
ちよ
待ちなさいよ
待ちませーん



待ちなさいって
言ってるのよ!
待ちま
せーん

彼女にとって僕が
他のクラスメイトと
同様にどうでもいい
存在なら

八つ当たりする
ためのゴミ箱と
同じような
ものなら



僕に去られた所で
痛くも痒くも
ないはずだ

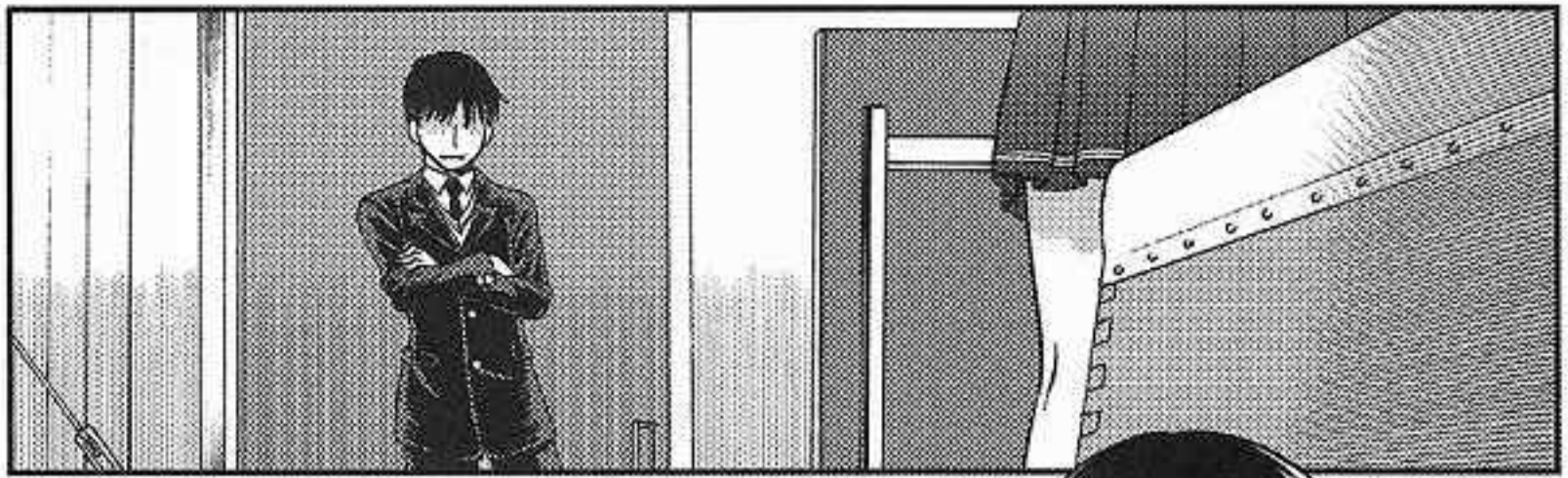
でも

待って!



待ってよ...

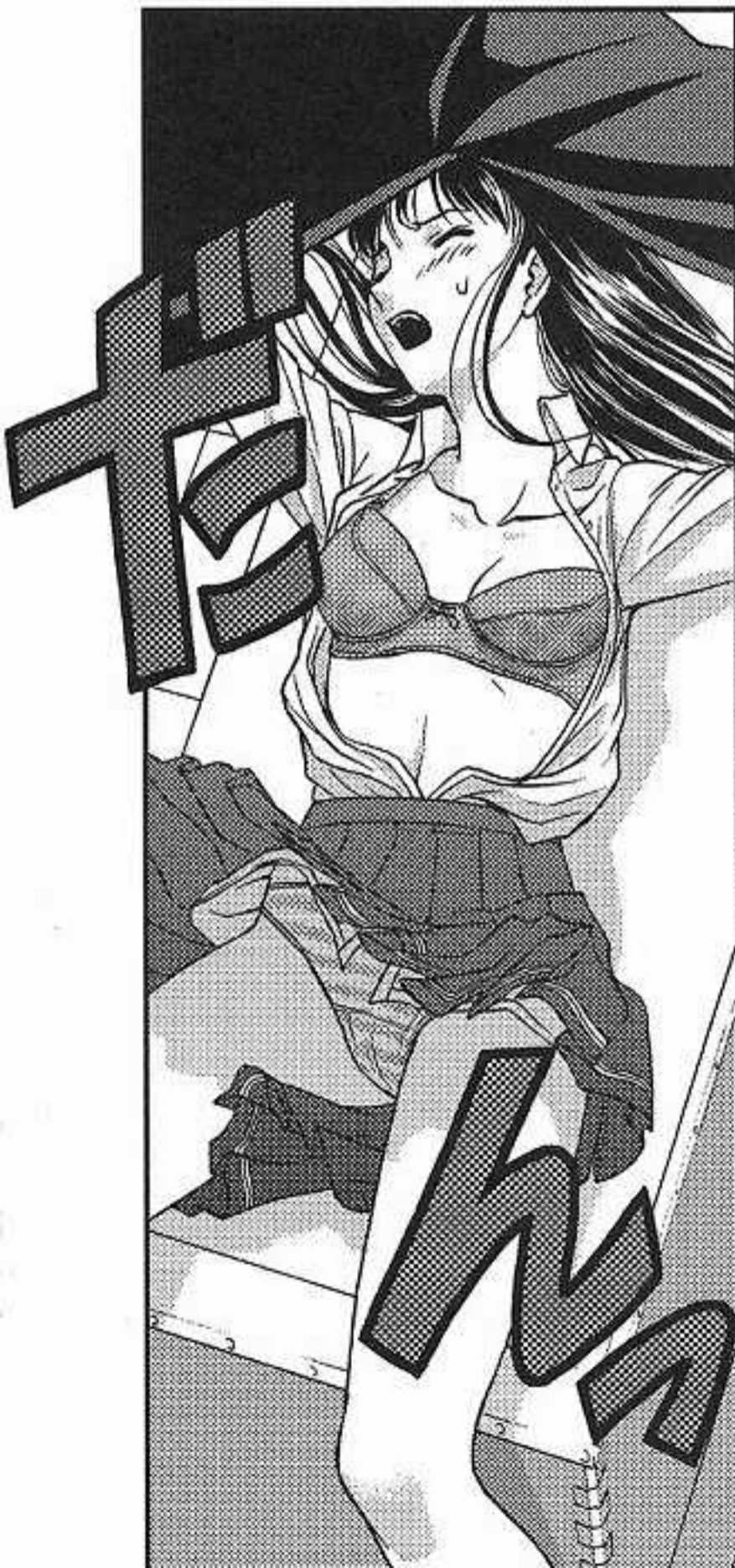




でも君はそこ「まで」されて
男が止まるわけがない
ことも分かっている

常に匂わせ期待させる
ことで僕を服従させて
きた、決して越える
ことのない一線

だが今
君は――



ちよっ
近づかない
で……ッ



その一線を越えた!



僕も十分興奮
している

はあ

はあ

何しろ毎晩夢にまで見た
君の胸が僕の手の中に
あるんだから

だから少し
乱暴になってしまう
かもしれない

口を真一文字に
結んで

意地でも悲鳴
なんてあげて
やるもんか

……って感じ？

あ、浅ましい
わね……

舐めてる姿は
犬そのものね！

飼い犬の
あなたには
お似合いだわ！

それが最後の
反撃かい？

いつもの嘲笑の
表情が上手く
作れてないよ

でもまあ
そういうことなら



じゃあ僕のも
舐めてよ



や…
やだっ…

おや可愛い反応

こうなった男の
それを見るのは
初めてか



ばっ……
馬鹿じゃないの!?

調子に
乗らないでよ!

するわけないでしょ
そんなこと!

じゃあやめて
そのドア開けて
帰っていいよ

別に鍵が
かかっている
わけじゃないし



そのままの姿で
職員室にでも
駆け込めば

僕は一発で
退学

君の目の前には
二度と姿を見せる
ことはない

二度と

孤高の人だった
以前の君なら
なにかあっても
こんなこと絶対に
しないだろう

でも今の君は

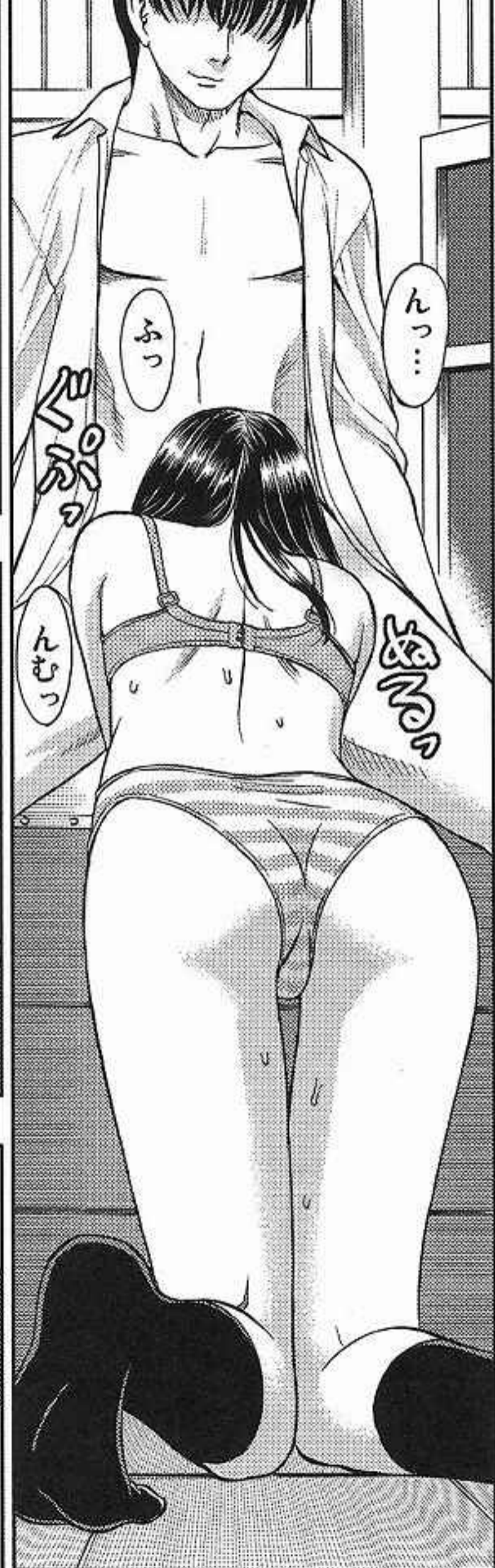
君の手荒い
スキンシップを受け
続けてきた僕への
奇妙な信頼感と

僕よりはるかに
賢いはずの君が僕の
言葉に従わなければ
ならない唯一の
要因から

はあ

はあ

逃れることはできない





上手くはないな
なんかお宝本の
形だけマネ
してる感じ

そんなんじや
何時間やつても
イけやしないよ

なんて



やっ、ちよっ

嘘ッ…



僕は爆発しそうだ！

ひゃっ



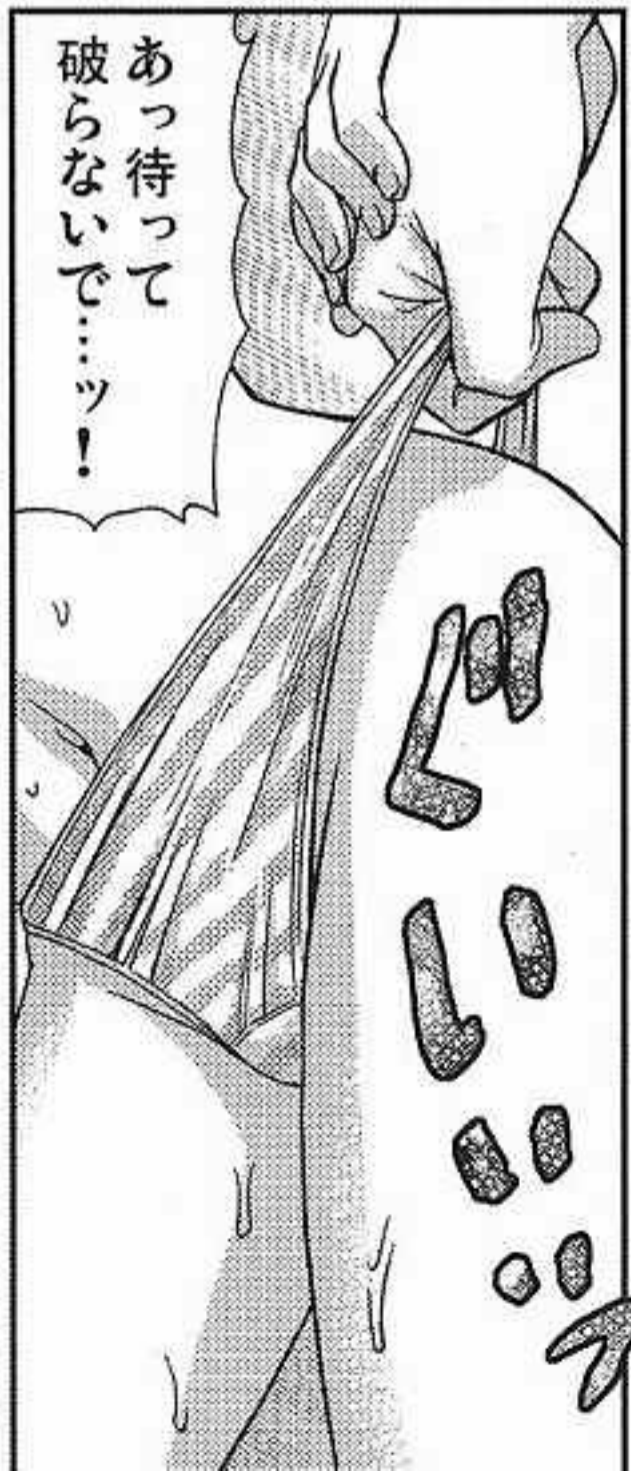
嘘だ
大嘘だ

はあ

仮にもっと下手
だったとしても

はあ

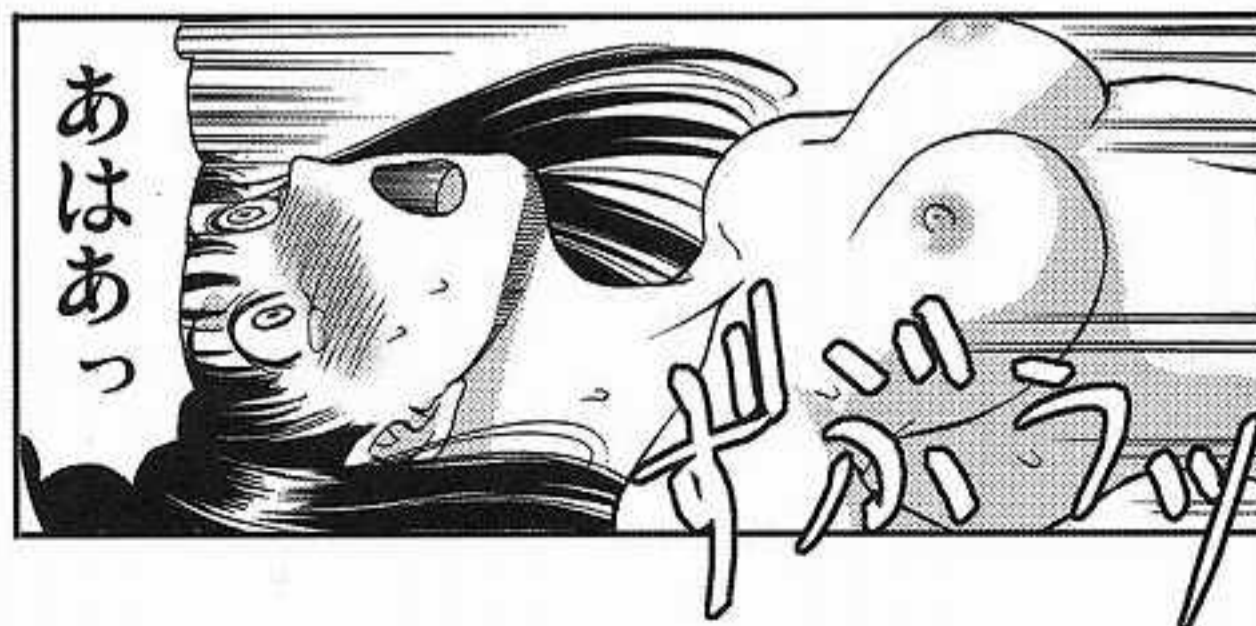
プライドの高い君が
羞恥と屈辱に耐えて
僕のを口に
含んでいるという
そのことだけで



ちゃんとは
脱ぐから
……ね?

帰れなく
なっちゃう…

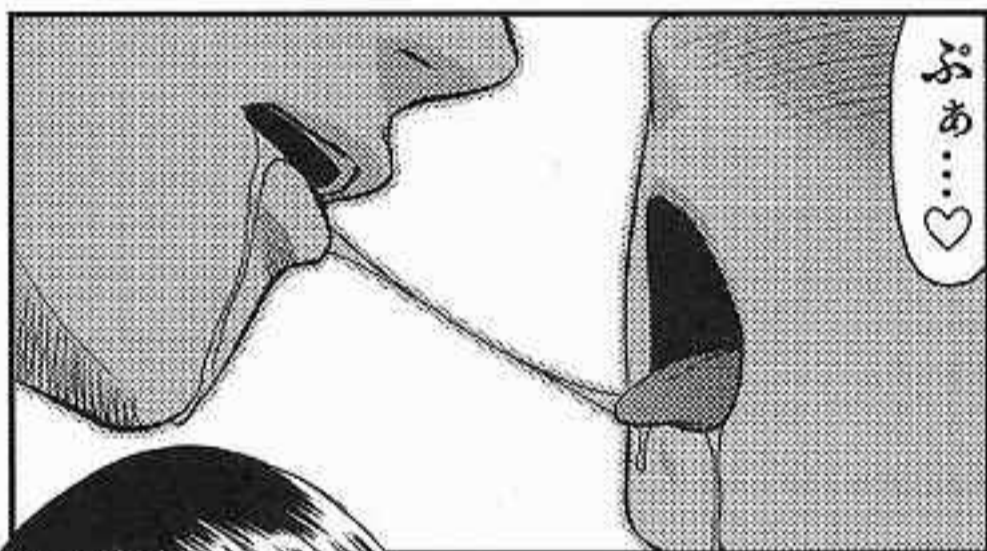
あっ待って
破らないで...ッ!

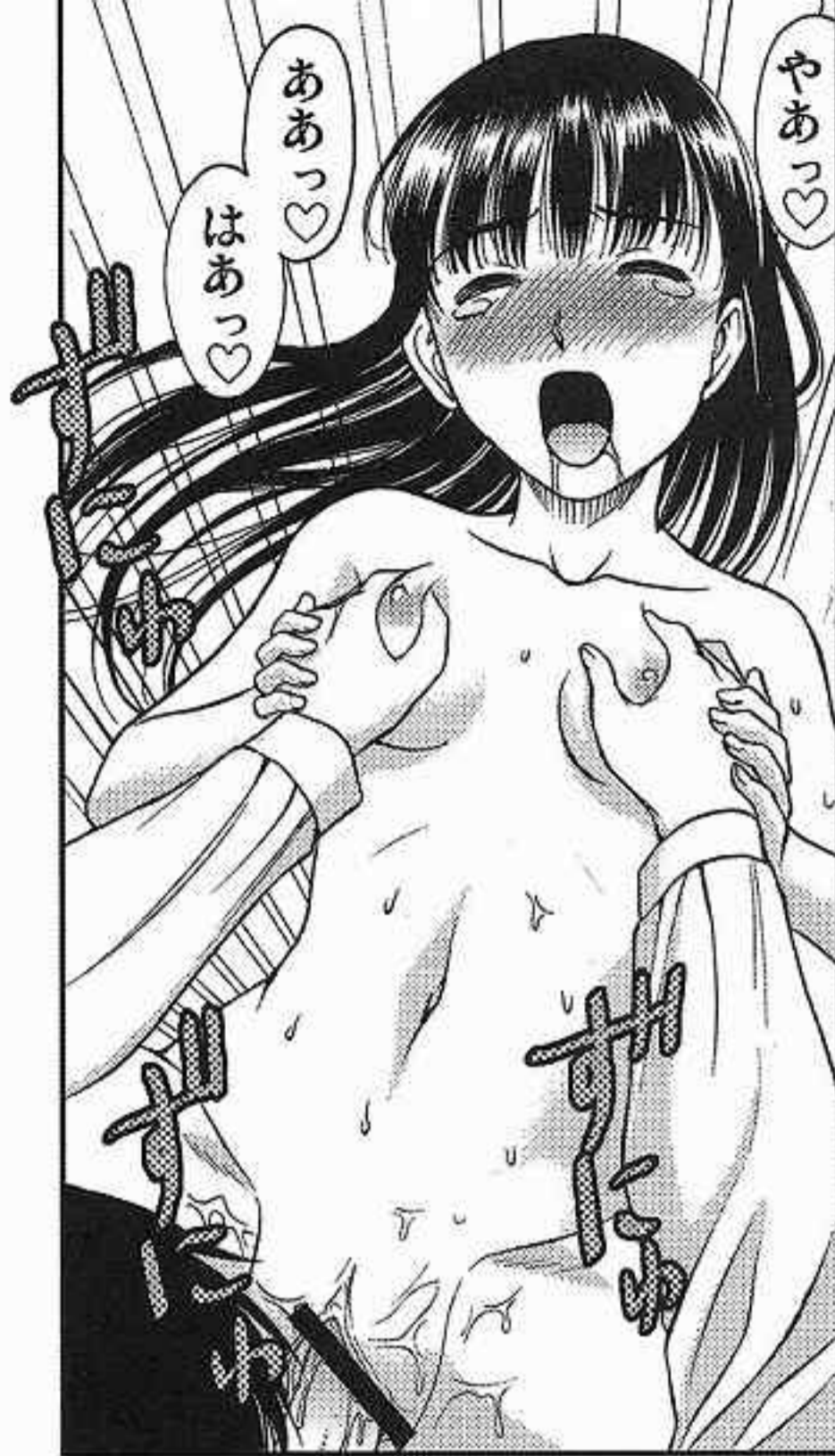






んふう…













あっゴメン
それで終わりだ

えっ!?

何でティッシュ
くらい持って
ないのよ!

普通そんなに
何個も持ち
歩かないよ

あーッ
もういいわよ
バカッ



ん…

じあ…



あ、また今
濡れて
るんじゃ…

カア



…なんか
気持ち悪い

ええ?

ちゃんと
拭いたのに
なあ



結局の所、僕がどう
頑張ったところで
策に長けた君に
勝てないのは
目に見えている

でも君には
一つだけ隙があった



誰かに必要と
されたい
誰かの役に
立ちたい

たとえ便利に
使われるだけ
だとしても
誰かに関わって
いたい

誰か私を求めて
私を見て



僕はそこに
つけこんだ



私はここに
いるよ
誰か私を見て

誰より君を見て
誰より君を求めた

嫌がられても
傷つけられても
ウザがられても
離れずに深く
踏み込んだ

そして僕は君に
とっていつしか
かけがえの
ないものになった

僕は僕自身を担保に
君の一部になった

僕は君のものに
なった

僕が君を裏切らない
限り君は僕を
切り離すことは
できない

かくして僕は
彼女の仮面を
破壊した

容赦のない罵倒は
まだ続いている

豊富な語彙から次々と
浴びせられるそれを
要約するとどうやら
今後の僕の態度に
対する要望らしい





愛しいよ絢辻さん

僕は君のもので

君は僕のものだ

オ ク ツ ケ

発行日 2009年6月15日
製作 袖入學堂茶舗
代表 吉田 勲
印刷所 藤式舎社ホフルス藤

<http://www.fuji.sakura.ne.jp/~sabo/>



■ 仙人掌堂本舖 ■

ADALT ONLY

